

Bibliophiles

ビブリアファイルズ No.11(2021年度)

新着図書案内・お知らせ 西宮東高校図書館

(ここで紹介するのは新しい本の一部です。)



『土偶を読む——130 年間解かれなかつた縄文神話の謎』竹倉史人

縄文時代に作られた土人形である土偶。数多くが発見されていますが、「一体あれは何の人形なのか?」という問いに対して、定説がありませんでした。「豊かさの象徴としての妊娠女性」だとか「目に見えない精霊の姿を現した像」とか、色々言われていましたが、筆者によれば具体的な根拠に欠けた説が多かったようです。人類学者の筆者が長年の研究により達した結論、それは「土偶は植物の姿をかたどった像」でした。本書は昨年のサントリー学芸賞を受賞しています。

『スッキリ見えるように戻る

視力回復セルフヨガ』山本正子

文科省の「学校保健統計調査」によれば、裸眼視力が 1.0 に満たない高校生は全体の 63% 以上、「眼鏡を常用すべき」という 0.3 未満でも 32% 近くもいるそうです。「視力は落ちちゃったんだから仕方ない」と思っているあなた、病院に行かなくてもこの本の「目のヨガ」で視力が戻ったという人は多いですよ。眼球自身の運動や眼球のツボに関係した運動が中心です。ぜひお試しを。

『黒牢城』

米澤 穂信

『このミステリーがすごい!』など、昨年の 4 大ミステリー賞を総なめにした超話題作です。人気作家の米澤氏が「時代小説と密室ミステリーの融合」というテーマに取り組み、しかも名探偵役があつた「天才軍師」と呼ばれる黒田官兵衛とあつては、米澤氏のファンならずとも心ひかれるものがありますね! 舞台は、現在の JR 伊丹駅近くにある有岡城。織田信長を裏切った荒木村重は有岡城にこもり、訪ねてきた信長の使者・官兵衛を地下牢に閉じ込めます。しかし、ある事件が・・・

『同志少女よ、敵を撃て』逢坂 冬馬

まったくの新人作家にもかかわらずアガサ・クリスティ賞大賞を受賞し、しかもはじめて選考委員全員が 5 点満点をつけたという、今話題の小説です。(ただしミステリーではありません、念のため。)

舞台は独ソ戦の激化する 1940 年代のソヴィエトで、実在した「女性狙撃兵」をモデルにしたストーリー。母をドイツ兵に殺され、遺体を焼き払われた少女が、復讐のために狙撃兵へと成長していき、女性の側から戦争と戦場を克明に描写していきます。結末にもぜひご注目を。

『その悩み、哲学者がすでに答えを出しています』

小林昌平

ネットを読んでいると、嫌いな人などへの悪口があふれていますよね。あなたも、どうも嫌いな人や合わない人がいて、心が憎しみに満ちてしまうことってありませんか? 哲学者のスピノザは、「人間には自由意志はない」と考え、人間は生まれ育ちや環境などの結果、人格が決まっているとしました。つまりひとの個性や人格はなるべくしてそうなっているので、変えられないのです。そう考えると、怒りや憎しみも減少するのでは? ぜひ一読を。

『芸能人はなぜ干されるのか?』 星野陽平

結局は解散してしまったアイドルグループ・SMAP ですが、所属している事務所から独立しようとしてその事務所から圧力をかけられ、独立に失敗した経緯は報道によりよく知られています。このように日本の芸能事務所は「タレントを所有物とみなす」傾向が強く、労働者の権利を保障していないケースが多いようです。筆者は、芸能界のこうした「闇」を暴き立てて、少しでも芸能界を改革するためにこの本を書いたそうです。



1/27(木)放課後、詩の朗読会です!

広い意味でのお薦めの詩を朗読してもらいます。広い意味ですので、俳句や川柳、ロックの歌詞でもいいですし、自作の詩でももちろん OK です。そのあと作品について解説してもらい、最後は優勝者を決めます。もちろん景品もありです。希望者は 1/21 (金) までに図書館まで。当日参観も可能です。

『最強脳 — 「スマホ脳」ハンセン先生の特別授業—』アンデシュ・ハンセン

日本だけでも 60 万部以上を売り、「オリコン」の 2021 年最も売れた本に選ばれた『スマホ脳』。「スマホを傍らに置くだけで記憶力や集中力は低下する」といったショッキングな内容を含む警告の書でした。筆者は「では、これからどうすれば良いのか?」という質問を日本のメディアから数多く受け、それへの回答として書いたのがこの本です。筆者によれば、なんと結論は一言で終わりです。『運動をしよう—そうすれば脳は確実に強くなる。』

『東京藝大で教わる西洋美術の見かた』

佐藤 直樹

東京藝術大学で筆者が実際に講義している「美術史概説」を本にした美術入門書ですが、面白いと評判で、この正月には TV の新春特別番組にもなりました。人気の「印象派」はほかに入門書が多くあるからとあえて外し、筆者独自の視点から多くの絵画を読み解きます。

今号のひとこと

利休めはとかく果報乃ものそかし菅丞相になるとおもへハ ※

(この利休という男は何にせよ運のいい男ですよ、追放されて非業の死を遂げた菅原道真さまと同列になるのだからね。) 千利休 (1522-1591)

今年生誕 500 年を迎える千利休は、日本の誇る文化「茶道」を完成させた偉人の一人です。しかし、時の権力者・豊臣秀吉から怒りを買って、最後は切腹を命じられてその生涯を終えました。しかし、なぜ秀吉が怒ったかについてはよく分っておらず、「利休は死なず、追放されただけ」という説を唱える本(中村修也『千利休 切腹と晩年の真実』)も出ました。図書館にありますので、ぜひお試しを。

※『千利休由緒書』より